

# カナダにおける美術連携事業の調査研究

—バンクーバーおよびケロウナ（ブリティッシュ・コロンビア州）の事例報告—

中野 良寿・安原 雅之\*

A Research on the Social Activities of the Art Institutions in Canada:  
Cases in Vancouver and Kelowna (British Columbia)

NAKANO Yoshihisa and YASUHARA Masayuki\*  
(Received January 11, 2011)

キーワード：カナダ、バンクーバー、ケロウナ、美術館、美術大学、社会連携

## はじめに

本稿は、「地域活性化のための美術連携事業の調査研究」<sup>1</sup>の一環として行った、カナダにおける調査の報告である。この調査研究は、そもそも、美術教育を専門とする大学が地域社会に対してどのように貢献すべきかを考察し、新しい地域貢献のモデルを提案することを目的とするプロジェクトの中心に位置づけられるものである。今回の調査に先立って、まず、山口市周辺の美術・教育機関の事例を調査し<sup>2</sup>、さらに、北海道釧路市の事例調査を行った<sup>3</sup>。そして、2010年度からは科学研究費の助成を受けて調査を継続している。

今回カナダを取り上げたのは、研究代表者である中野が過去に研究活動を行ったブリティッシュ・コロンビア州における美術連携事業が、本研究の調査対象として適切であると考えられたからである。

1867年に建国されたカナダは、アメリカ合衆国の北に位置する国であり、多様な民族によって人口が構成されている。また、言語は英語とフランス語が公用語とされ、西海岸地域においては英語が主流となる。西海岸に位置するブリティッシュ・コロンビア州は、歴史的にも多数のファースト・ネイション、すなわち、かつて“インディアン”と呼ばれていた先住民族の部族が集中している地域であり、独自の文化的特徴を持っている。近年では、ハイダ族など北米におけるファースト・ネイションの文化を再評価するような文化政策がとられており、美術館における作品展示等においても白人文化と先住民との政治的かつ文化的な軋轢を是正するような動きが見受けられる。

今回の調査では、カナダ西部の太平洋に面した湾岸地域に位置するブリティッシュ・コロンビア州の2つの都市、バンクーバーとケロウナを訪問した。前者は、ブリティッシュ・コロンビア州最大の都市であり、2010年には冬期オリンピックが開催されて注目を集めた。一方ケロウナ市は、同州の内陸部に位置し、オカナガン湖周辺を中心にして発展

\*愛知県立芸術大学

した都市である。市域の人口は約16万人であり<sup>4</sup>、都市の規模としては山口市に比類すると言えるだろう。この地域は準乾燥地帯に属しており、歴史的には第一次産業の果樹園が主な産業であった。退職後の老人が移住するなど、リゾート地としての役割も近年高まってきており今後の人口の増加がみこまれる。

それぞれの都市において、下記の美術関係諸施設／機関等において調査を行った。

## 1. バンクーバー

### (1) カフェ・フォー・コンテンポラリー・アート

**Café for Contemporary Art**

### (2) プレゼンテーション・ハウス・アーツ・センター

**Presentation House Arts Centre**

### (3) ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館

**Museum of Anthropology at British Columbia University**

### (4) バンクーバー・アート・ギャラリー

**Vancouver Art Gallery**

### (5) ディープ・コーヴにおける討論会

**Public Meeting in Deep Cove**

## 2. ケロウナ

### (1) ケロウナ・アート・ギャラリー

**Kelowna Art Gallery**

### (2) ブリティッシュ・コロンビア大学オカナガン校

**British Columbia University Okanagan Campus**

### (3) ウッド・ヘヴン

**Woodheaven**

## 1. バンクーバー

### 1-1 カフェ・フォー・コンテンポラリー・アート

カフェ・フォー・コンテンポラリー・アートは、ノース・バンクーバー市にある、現代アートのギャラリーとカフェを併設するオルタナティブなスペースである。このスペースを運営および経営しているのはインデペンデントキュレーターのタイラー・ラッセル Tyler Russel氏である。ノース・バンクーバーは、バラード海峡を挟んだバンクーバーの対岸に位置する市であり、バンクーバーに通勤する富裕層が居住する地域が工業地帯に隣接しているのが特徴である。このカフェ・フォー・コンテンポラリー・アートは、それらの境に位置しており、もともと現代アートに関心のある富裕層の人々だけでなく、近隣の労働者階級の人々にもカフェを通じて現代アートを紹介することが意図されている。

さて、このカフェ・スペースは文字通りカフェとして機能し、地域の住民のための憩いの場所ともなっている一方、ギャラリーでは定期的にテーマ性のある展示が行われている。訪問時にはバンクーバーを代表する美術大学、エミリー・カー・ユニバーシティー・オブ・アート+デザイン Emily Carr University of Art + Designで教鞭をとるアドリア

ン・ボストンAdrian Boston氏（ニューメディア／デザイン史）のキュレーションによる展覧会の搬入が行われていた。この展示は、「インダストリアル・デザイン・イン・ノース・バンクーバー Industrial Design In North Vancouver」と題するもので、ノース・バンクーバーの5つの企業による商品のプロダクト・デザインに焦点を当てたものとなっている。

これらのうち、2つの企業のデザインについて触れておきたい。まず、竹の集成材を使ったスケートボードについて。これは初期の試作の段階から順を追って、素材選びから形体の合理化、耐久性など様々な検討の結果最終的な仕様になったことがわかる展示になっていた。ボストン氏によれば、この竹の集成材はおそらく日本で製造され、カナダに輸入されたものであるらしい。

また、もうひとつは、スクリュー・ドライバーやレンチなど多機能をもつ工具であるKelvin 23のプロトタイプやその設計についての展示である。この工具は、カナダで最もメジャーなホームセンターであるカナディアン・タイヤ Canadian Tireで販売されているものであった。ただし、ホームセンターで販売されているのは廉価版で、デザインも多少異なっている。展示されたものは、より完成度の高いものであった。

この展示会で展示される作品は、いずれもノース・バンクーバーの商品であり、ノース・バンクーバーの工業地区で生産される商品のプロダクト・デザインの価値を再発見する意図があると同時に、日常的にはアートの視点から見られることが少ないプロダクト・デザインへの関心を導く展示となっていた。



図1 展覧会のDM。この展覧会で取り上げられるプロダクトの画像で構成されている。

## 1-2 プレゼンテーション・ハウス・アーツ・センター

プレゼンテーション・ハウス・アーツ・センターは、ノース・バンクーバー市における文化活動の核となる施設である。この施設は、プレゼンテーション・ハウス文化協会 Presentation House Cultural Society によって運営されており、次の3つの組織を包括している。

- ・プレゼンテーション・ハウス・シアター Presentation House Theatre
- ・プレゼンテーション・ハウス・ギャラリー Presentation House Gallery
- ・ノース・バンクーバー博物館 North Vancouver Museum

建物の1階にシアターのオフィスと劇場があり、中2階に楽屋、ショップ、ロビーがある。また、3階にはギャラリーと本屋があるといったように、複合的な施設であるが、そ

れぞれは独立した非営利組織であり、独自のプログラムを組んで運営している。

プレゼンテーション・ハウス・アーツ・センターの建物は、もともと1902年に学校として建設されたものであった。その後、1913年にノース・バンクーバー市の管轄となり、市庁舎（シティー・ホール）となった。そして、62年のあいだ、警察所や裁判所など様々な用途で利用された。そして、1975年に新しい市庁舎が建設されたことを機に、ノース・バンクーバー・コミュニティー・アート・カウンシルの要請により、この地域のアート・センターとして使われるようになった

#### ・プレゼンテーション・ハウス・シアター

この劇場のディレクター、ブレンダ・レイドリイ Brenda Leadlay 氏からこの建物の歴史的な経緯を聞いた。いわゆる“箱もの”である新しい建物をすぐに作るのではなく、もともとある建物を様々な方法で有効活用しようとする精神が印象的であった。大規模な商業的な劇場はバンクーバーの中心地にあるため、ここでは非営利で質の良い内容を持った実験的な演劇を行なう方針のようで、コンテンツで勝負しようという姿勢に好感がもてた。

#### ・プレゼンテーション・ハウス・ギャラリー

このギャラリーは、写真やメディア関係を扱うギャラリーとしてカナダ西部で最も大きなものであり、1981年以降、アートとしての写真およびドキュメンタリー性の高い写真作品を取り上げて展示してきた場所である。現在のディレクター、レイド・シャイヤー Reid Shier 氏も、そのような傾向を継続している。訪問時には、ノース・バンクーバー出身のアーティスト、グレン・ルイス Glenn Lewis (1935-) の作品展示が準備されていた。写真とパフォーマンスに関する映像を使ったコンセプチュアルな作品群に加え、この作家の初期のセラミック作品も展示されており、写真のみではなく、より包括的な展示企画のようだった。また、作家はバンクーバー郊外在住であり、地元のアーティストの支援という意味も大きいと思う。

また、この地域への教育支援として年に2回、地元の中高校生対象にテーマ性のある写真作品の公募を行なっている。たとえば、“ポートレート”や“地元の産業”などのテーマを与え、作品を公募し、入選作品による展示会を開催することにより、地域に存在する生徒たちに写真への興味を引き出そうとする努力を行い、結果を出しているという。



図2 | 図3

図2 プレゼンテーション・ハウスの外観

図3 プレゼンテーション・ハウス・シアターについてのインタビュー。ラッセル氏（右）とレイドリイ氏（右から二番目）。

### 1-3 ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館

この博物館は、民族学関係の約36,000点と考古学に関わる536,000点のコレクションを所有する、世界的に有名な博物館である。とりわけ、約6,000点におよぶファースト・ネイション関係のコレクションは、この博物館の目玉となっている。建築としても注目される博物館のスペースに、巨大なトーテンポールが数多く展示されており、研究や学習のみならず、観光客にとっても魅力あるスポットとなっている。

この博物館には、教育関係および一般人向けのプログラムを担当するキュレーターが1名おり、そのキュレーターのもと、インターンシップとして携わる2名の学生およびアルバイトとして雇用される学生によるスタッフらによって、教育的なプログラムが展開されている。

この博物館は、大学に属するため、所蔵品の展示だけではなく、教育および研究に関わる活動を非常に盛んに行っていることが特徴であると言えよう。美術史や人類学など、さまざまな授業で博物館での学習が取り込まれている他、各種シンポジウムや学会などが常時開催されている。最近の傾向として、学際的な活動も展開されている。

主要な一般向けの教育プログラムとしては、博物館のツアーがある。これは、学年（年齢）によって異なる内容が組み込まれ、ボランティア・スタッフによる案内で実施されるもので、地元の小学校から高校までの学校と連携してプログラムを運営している。

### 1-4 バンクーバー・アート・ギャラリー

バンクーバー・アート・ギャラリーは、バンクーバーの最も重要な美術館である（日本語ではバンクーバー美術館と訳される場合もある）。ダウンタウンの中心地にあるこの美術館の建物は、もともと裁判所として使われていた。コレクションには計10,000点以上の所蔵作品がある大規模な美術館である。常設展示はカナダ出身の女流アーティスト、エミリー・カー Emily Carr (1871-1845) の作品が中心となっている。冬期オリンピック開催などにより活発化しているバンクーバーの文化発信の拠点としての大きな役割をおっている。近年では、ブライアン・ヤング Brian Jungen など、現代美術で活躍するカナダ人アーティストたちの重要な展覧会を多数おこなっている。また教育普及プログラムなども充実しており、地域社会との良好な関係の構築や、芸術作品の一般市民への理解向上への様々なワークショップや企画展示等を行なっている。

#### ・教育プログラムについて

バンクーバー・アート・ギャラリーにはさまざまな教育的なプログラムがあるが、特に地元教員の実践力、資質向上のための教育普及プログラムに注目したい。このプログラムには、美術館における特別展、企画展について、小・中・高校生を対象とした鑑賞教材としてのガイドがある。これは、生徒を美術館に引率し、美術作品の鑑賞を行なうところから、学校の教室に戻ってから行う討議までを想定したガイドであり、教師が必要とする作家および作品鑑賞に関する基礎知識から、生徒のレベル（年齢）に合わせた質問事項までを網羅している。

たとえば、調査時に企画展示されていた画家ケリー・ジェームス・マーシャル Kerry James Marshall (1955-) の作品についての「バンクーバー美術館における教師のための作品鑑賞用プログラム」ガイドには次のような内容が含まれている。

- 1) プログラムの基本情報と目標について
- 2) ケリー・ジェームス・マーシャル展の背景について
- 3) ケリー・ジェームス・マーシャルの作家としての背景について
- 4) アメリカの公民権運動について(公民権運動の詳しい期日と出来事について)
- 5) 学外鑑賞活動の事前・事後指導について
- 6) 専門用語について
- 7) 参考文献

ケリー・ジェームス・マーシャルは、国際的な知名度をもつアフリカ系アメリカ人の芸術家であり、大規模な絵画作品で知られている。土産物風の一見プリミティブな画面構成と、登場する人物はほとんど黒人であることが印象的な作風である。彼の作品を鑑賞するにあたっては、彼の生立ちと、アメリカ合衆国における公民権運動のことを理解することが重要である。この鑑賞ガイドでは画家本人の言葉と公民権運動についての時代背景の解説が詳しくなされている。また、鑑賞において生徒の意見が書き込むことができるようになったワークシートがあり、鑑賞における観点が示されている。

この企画展示および鑑賞ガイドでは、美術の教科だけでなく、歴史や人権などの倫理の教科にもおよぶ内容をもっており、美術的・造形的な内容を越えた知識が必要となる。

各学校の教員にとって具体的な作品背景の知識や鑑賞方法が示されているということは大変意義のある教材であり、美術館側にとっても生徒を含む学校関係者が団体として入館することによって入館者数の増加につながり、双方にとって利点のあるガイドである。以上のように、この観賞用ガイドは美術館周辺地域の学校と美術館を結びつけるための重要なツールになっていると思う。

## 1-5 ディープ・コーヴにおける討論会

ディープ・コーヴ Deep Coveは、ノース・バンクーバーのはずれにある小さな町である。この町には海につながった入江があり、森林と海が両方たのしめるリゾート地である。夏にはカヌーやシーカヤック、冬にはクロスカントリーなどのアトラクションがあり、アウトドア好きの観光客の穴場的なスポットとなっている。入江に沿った公園は住宅地と接しており、この風向明媚な場所にあこがれてこのエリアに移住した住民も多いらしい。

このような町に、2010年に、バンクーバー市を中心に展開するザ・ネックレス・プロジェクト The Necklace Project<sup>5</sup> におけるパブリック・アート作品の設置計画が公開されたが、この計画におけるパブリック・アートのプランについて市民の反対運動がおこっていた。そして、2010年9月9日に、この町で、パブリック・アートの設置計画に関する熱い討論会が開かれていた。

行政主導で計画されるパブリック・アートに対して住民がどのように対峙するのかを観察するために、討論会に出席した。討論会の会場は、町の中心にあるディープ・コーヴ・ショー・シアターという小さな劇場であった。討論に参加していた住民たちの間には、狂信的と言っても過言ではないような強い反感がみなぎっていたのが印象的であった。そして、市の文化振興課の担当者に対して、住民らは、次々と反対意見を述べていた。

この会では、行政側のシティー・アンド・ディストリクト・オブ・ノース・バンクーバーズ・アーツ・オフィス City and District of North Vancouver's Art's Officeのディ

レクターであるイアン・フォルサイス Ian Forsyth 氏が市民への説明に追われていた。問題となるパブリック・アートのプランは、ステンレス製のパンチングメタルの素材をシリンダー状にしたような彫刻作品で、高さが5メートルくらいあり、底部の木の株のようなものからパイプが生えているような形状だった。会場には50cmくらいのマケットがあり、一見すると、抽象と具象の融合した一般的な彫刻作品に見えた。しかし、説明によれば、彫刻の上部にはLEDライトが埋め込まれて、夜にはそれが点灯するというもので、その彫刻全体の形状は、大麻を吸引するときに使うドープ・パイプ dope pipe とよばれる水パイプを連想させるものであるらしいことがわかった。大麻の栽培や売買などが大きな社会問題になっているカナダにおいて、そのような連想を呼び起こすアート作品は、住民にとって全く許しがたいものであったのだ。

また、この彫刻作品に76,000カナダドル（約630万円）の予算がつぎ込まれることで、火に油を注ぐような議論の展開となっていた。おそらく、都市部にこの程度の予算でパブリック・アートを設置するのは珍しくはないと思われるが、この町では前例のない予算額のようにだった。結局この意見交換会は、市側と地元住民との意見は平行線で、特に進展はなかった。会の終了後に、設置予定地を見学したが、風光明媚で閑静とした水辺の公園であり、そこに隣接する住宅街の住民から拒否反応がでるのもうなずけるものだった。5メートルという大きさも、予定地の広さからして少し大きすぎるのではないかと思われた。行政側の担当者によれば、この作品はこのロケーションのために考案されたものではなく、まず作品があり、その設置場所としてディーブ・コーヴが候補として挙がったとのことだった。いずれにせよ、管轄地域を芸術によって振興しようとするノース・バンクーバーの行政側と住民側との意見のずれが明確に現れていた。

## 2. ケロウナ

### 2-1 ケロウナ・アート・ギャラリー

ケロウナ市の中心地であり文化推進地区に位置するケロウナ・アート・ギャラリーは、独自のコレクションを所有する美術館であり、ケロウナ地域におけるアートを牽引する文化施設である。カナダの公的な美術館のひとつであり、展示室では、ローカル性をもった内容から、国際的な内容をもったものまで、多様な展示が企画されている。この美術館は、4つの展示室の他に、2つの教室を保有しており、さまざまな年齢の市民を対象とするワークショップ等が常時開催されている。

筆者はこのケロウナ・アート・ギャラリーで2007年に展覧会を行なったことがあり、レジデンス・プログラムとして地元のコミュニティーとのワークショップも行なった<sup>6</sup>。学芸員のルネ・バージェス Renee Burgess氏は、そのときのキュレーターであり、彼女が考案した地域貢献の一環としてのレジデンス・プログラムに関わることができた。

今回の訪問では、この美術館の、美術による地域との連携事例を調査した。特に、美術館と地元の学校教育（美術教育）との関わりについて、インタビューをおこなった。その結果、この美術館は教育普及にかなり力をいれており、実際に鑑賞教材や地元に住む先住民の文化を受けつぐ芸術家の指導によるワークショップ作品など、大変良質の具体的成果物が残るような活動を行っていることがわかった<sup>7</sup>。

## 2-2 ブリティッシュ・コロンビア大学オカナガン校

かつてオカナガン大学カレッジ Okanagan University College という地元の独立した大学として存続していた教育機関が、ブリティッシュ・コロンビア大学に併合され、2005年にブリティッシュ・コロンビア大学オカナガン校として開校した。以来、学生数は増加しており、それに伴いキャンパスは拡張され、学内の設備の補強が急速に進んでいる。現在のオカナガン校は人文系、理系、芸術等の専攻がある総合大学であり、学部と大学院がある。

このUBC オカナガン校の学部構成中で、芸術系に関する学部として創造的・批評的研究コース The Faculty of Creative and Critical Studies (以後FCCS) というコースが特に特徴的であると言えよう。このコースは、従来の枠組みには収まらない創造的研究と批評的研究の融合を目指す学際的な内容を提供している。

今回の調査に際して、この学部を担当するドイツ学のクロード・デマレー Claude Desmarais氏、パフォーマンスのニール・カッジャー Neil Cadger氏、学部長のナンシー・ホームズ Nancy Holmes氏にインタビューを行った。

FCCSは端的に言うと、今までの芸術教科における枠組みにない創造性を重視した学部である。たとえば“パフォーマンス・アーツ”のコースを配する他の大学の芸術コースとの違いは、いくつもの創造性の原理と批評性の原理を織り交ぜて反映させ、分析と理論化を促し、創造的な実践活動が出来る人材の育成を行っているようだ。たとえば視覚芸術を学びたい学生は美術史コースの実技コースの講義を受けることができる、さらにクリエイティブ・ライティング (creative writing) や文学やパフォーマンス、演劇史など発展的に学ぶことができるといったように、通常の学部における教科の枠組みを超えて学べる仕組みになっている。教科や時代性の枠組みを超え、たとえば文学と映像、異なる言語や地域間の問題などを平行して学べるなど、創造性と批判性をキーワードに、かなり踏み込んだ教育が行なわれているようである。

クロード・デマレー氏はドイツ語という教科から、基本的な語学力だけでなく、創造的なコミュニケーションの方法や異文化交流、ドイツ文学や詩、パフォーマンスなど、ドイツ語から出発し、他の芸術的な教科との立体的な結びつきを促すような指導をしている。

また、ニール・カッジャー氏は自身も身体表現のパフォーマーとして活発な創作活動を行ないながら、創造的かつ教科横断的な内容をもつ身体表現の授業を行なっている。カッジャー氏によれば、FCCSの学部の名称を決定するにあたり、創造性を育てていくために、批評性の大切さを重視されたのであった。教科横断的な学部は、一見自由で、何でも出来るかのような錯覚をおこしやすいが、ともするとどの教科にも収まらず、専門性の不足した状態に成りやすい。そうならないためにも創造性の原理と批評性の原理を両方併せ持つこと、またそれを理論化して行く実践が大切であるという主張である。

FCCS 内の専攻として、美術史、クリエイティブ・ライティング、カルチュラル・スタディーズ、語学系 (英語、フランス語、ドイツ語、日本語、スペイン語)、パフォーマンス/演劇、ビジュアル・アートが挙げられる。絵画、彫刻、デザイン、版画、工芸、メディアなど、従来の美術系の内容はビジュアル・アートのコースに包括されていて、アトリエや工具などの施設も充実している。



図 4	図 5
図 6	図 7

図 4 UBC オカナガンのキャンパス  
 図 5 デスマレス氏の授業風景  
 図 6 パフォーマンス・プログラム担当のカッジャー氏  
 図 7 版画工房

### 2-3 Nancy Holmes氏によるウッドヘーブンのプロジェクトについての解説

ナンシー・ホームズ氏はFCCSの学部長をしており、自身もクリエイティブ・ライティング、すなわち「創造的な執筆」、詩の創作をする芸術家であり、多くの著作がある。日本においてはクリエイティブ・ライティングのジャンルはおそらく文学部に属するが、文学部の学生の卒業研究は一般的に文学作品の分析的なものであり、自身が創作した小説などは評価の対象にすらならないのではないだろうか。

このナンシー・ホームズ氏と地元の芸術家を中心なって学際的に行なっているウッドヘーブン・エコ・アート・プロジェクト Woodheaven Eco Art Project という学外プロジェクトがある。これは大学から車で20分ほど離れたウッドヘーブン自然保護区公園 Woodheaven Nature Conservancy Regional Parkという森林公園を舞台に行なわれている。この森林公園で、FCCSに関わる教員および学生、あるいは地域の芸術家によるワークショップ、作品展示、パフォーマンス、ポエトリー・リーディング、演奏などの企画が断続的に行なわれている。これらの活動は、大学の財団の助成をうけており、行政からはオカナガン地域の財団の支援を受けている。

この企画はエコ・アート・プロジェクトの名称の通り、森林公園のエコロジカルな環境を利用したプロジェクトであり、自然環境を創造活動の源泉として取り扱っている。森は歴史的に文学、詩、音楽、美術など、様々なインスピレーションの源としていつの時代も芸術家にとって重要なモチーフだったこと、ケロウナ市は広大な大地と森に囲まれた都市であることも、このプロジェクトが生まれる前提となっている。また、この森林公園の入り口にある管理小屋には彫刻家が住んでおり、このプロジェクトに関わると共に、普段の生活の中で、この森に関する映像と写真による記録を行なっているようである。基本的には森に対して大きな負荷を与えないという主旨のもとで行なわれているプロジェクトなので、巨大な彫刻や休憩所をつくるなどの土木工事は行なわれない。仮設的に設置された彫

刻などもすべて最小限の大きさで、量的な圧迫感をあまり感じさせないものが注意深く選ばれている。パフォーマンスや演奏、ポエトリー・リーディングなども無形のものなので、これらの映像などによるドキュメンテーションが今後重要になってくるのではないかとナンシー・ホームズ氏は語ってくれた。



図 8	図 9
図 10	図 11
図 12	図 13

図 8 ウッドヘーヴン入り口

図 9 彫刻作品

図 10 ウッドヘーヴンの森林風景

図 11 ウッドヘーヴンのトレイルを歩くホームズ氏とバージェス氏

図 12 ワークショップで制作された石と文字の作品

図 13 アクリル板を使ったテキストとドローイングの作品

## まとめ

ケロウナにおけるウッドヘーブンの例にみられるように、美術による連携には、その都市のおかれた環境が大きく作用する。山口市のような地方都市を芸術によってどのようなかたちで再活性化させてゆくのかという課題に対応するものとして、ウッドヘーブンの例は、非常に参考になる。一方、巨大な都市であるバンクーバー市のカフェ・フォー・コンテナポラリー・アートの事例におけるように、大都市の中心部からずれたノース・バンクーバーなどのロケーションの場合、地勢の文脈の読み取り方やコミュニティとの協働の仕方など参考になる点があった。

プレゼンテーション・アーツ・センターでは建物より中身を大切に、良質な企画をすることの大切さを改めて感じた。今回訪れたバンクーバー・アート・ギャラリー、ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館、ケロウナ・アート・ギャラリーなどの、どの公的な美術関連施設も、その役割として美術教育プログラムを充実させている。これには市民のみならず、地域の学校の教員を通して生徒に学習させる教育普及も含まれている。また、ブリティッシュ・コロンビア大学オカナガン校のFCCSの取り組みは、創造性と批評性というキーワードを核として芸術に関する様々教科を学際的に、学習可能なプログラム設計を行なっており、ウッドヘーブンなどの学外における地域の環境を生かした試みにも取り組んでいる。

各美術関連機関のそれぞれの地域に対する取り組みは、都市そのものの成立の歴史や現状の文脈を正確に読み取り、その前提をうまく生かす方向でアートワークを挿入してゆくことが求められている現状がある。また、その地域における生活者の視点がどの方向にむかっているのかを企画者は意識する必要があるだろう。この点においては日本の地方都市でも同じ状況である。国民性の違いもあるだろうが、地域の社会的利益と美術・芸術における長期的な文化向上のベクトルを合わせることの工夫が求められており、実際に各機関が様々な知恵を出し合って美術の社会連携による地域活性化が行なわれる事を望む。

## 謝辞

今回のカナダでの調査において北バンクーバーではタイラー・ラッセル氏、ケロウナではルネ・バージェス氏に各機関への連絡および調整いただきました。また各機関において以下の方々に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。アドリアン・ボストン、ブレンダ・レイドリ、レイド・シャイヤ、グレン・ルイス、イアン・フォルサイ、クロード・デマレー、ニール・カッジャー、ナンシー・ホームズ。

## 注

- 1 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号22520138(中野良寿代表)。
- 2 2009年に、秋吉台国際芸術村、山口情報芸術センター、山口県立美術館等の山口市および山口市周辺の美術館およびアートセンターについての各機関の連携例の調査を行った。
- 3 2009年度に山口大学教育学部学部長裁量経費による助成を受けて実施した調査。この調査については、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第29号に報告した。
- 4 2006年の調査による統計。ケロウナ市の公式HPに掲載されている。

<http://www.kelowna.ca/CM/page130.aspx>

- 5 バンクーバー近郊の市が連携し、計10件のパブリック・アートを設置するプロジェクト。ディープ・コーヴのプランもそのひとつ。詳細については、ウェブサイトを参照されたい。

<http://www.necklaceproject.ca/index.html>

- 6 ノーヴァヤ・リユストラというユニットとして行った展覧会（2006年7月25日ー9月21日）。
- 7 ケロウナ・アート・ギャラリーにおける学校教育と美術館との連携例としては、本誌に掲載される論文、福田隆眞、中野良寿「カナダ・ケロウナ・アート・ギャラリーにおける美術教育プログラムの一例」を参照されたい。

## 参考文献

福田隆眞、中野良寿：「美術活動の連携についてー北海道立釧路芸術館、釧路市立美術館の事例を基にした考察-」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第29号』, 25-32pp, 2010.

Augaitis, Diana : *Brian Jungen*. Vancouver: Vancouver Art Gallery and Douglas & McIntyre, 2005. (バンクーバー・アート・ギャラリーによって企画され、ニューヨーク、バンクーバー、モントリオールを巡回した展覧会のカタログ。)

Lige, Sara : *We are Artists*. Kelowna: Kelowna Art Gallery, 2009. (2009年11月28日から2010年3月21日までケロウナ・アート・ギャラリーで開催された同名の展覧会のカタログ。)

## 関連ウェブサイト

### 都市関連：

バンクーバー公式サイト <http://vancouver.ca/>

ノース・バンクーバー公式サイト <http://www.cnv.org/>

ケロウナ公式サイト <http://www.kelowna.ca/cm/site3.aspx>

### 芸術関連施設：

カフェ・フォー・コンテンポラリー・アート <http://cafeforcontemporaryart.com/>  
プレゼンテーション・ハウス・アーツ・センター

[http://www.artsoffice.ca/arts\\_directory/facilities\\_and\\_venues/directory17.php](http://www.artsoffice.ca/arts_directory/facilities_and_venues/directory17.php)

バンクーバー・アート・ギャラリー <http://www.vanartgallery.bc.ca/>

ブリティッシュ・コロンビア大学民族学博物館 <http://www.moa.ubc.ca/>

Kelowna Art Gallery 公式サイト <http://www.kelownaartgallery.com/>

UCB オカナガン校 ザ・ファクリティイー・オブ・クリエイティブ・アンド・クリティカル・スタディーズ <http://web.ubc.ca/okanagan/creativeandcritical/welcome.html>

ウッドヘーヴン・プロジェクト公式サイト <http://www.woodhaven.ok.ubc.ca/>